はじめに

本研究は, WHO（世界保健機関）の ICF（国際生活機能分類）及びその派生分類である ICF-CY（同児童版）の特別支援教育における具体的な活用方法を明らかにし，併せてそのためのツールの開発をするとともに，適切な成果公表のために，特別支援教育における ICF 及び ICF-CY の活用等に関する状況を把握することを目的とした研究です。

本研究は，主に①本研究所の ICF-CY 関連研究「ICF 児童青年期バージョンの教育施策への活用に関する開発的研究」（平成 18 ～ 19 年度）において実用性の高い学校現場での活用方法について検討する必要が指摘されたこと，②中央教育審議会答申の中で特別支援教育における ICF の必要性について触れられ，ICF への関心や活用へのニーズが高まると予想されたこと，③ ICF-CY 日本語訳発行の動きの中で，ICF-CY への関心や活用へのニーズが高まると予想されたこと，等を背景としながら，設定されました。

ICF-CY は ICF の派生分類であり，概念的な構造は ICF と同一です。したがって，ICF-CY の分類項目を用いず，概念的な枠組みのみが活用されることも想定し，研究課題には ICF-CY を冠しながらも，本研究では，ICF-CY だけでなく必要に応じて ICF についても触れ，表記についてもそこでの文脈に合わせて「ICF 及び ICF-CY」等を用いています。

研究期間の終了にあたり，以下のような構成で研究報告書を作成し，成果を公表することにしました。

総論編では，次の 3 編の論文を掲載し，①特別支援教育において ICF や ICF-CY を活用しようとしてきたこれまでの取り組みの中での，背景や成果，課題等，②全国の特別支援学校における ICF 及び ICF-CY の認知度や活用の状況等，③特別支援教育の文脈に適したチェックリストとなるような ICF-CY の分類項目抽出のための取り組みについて述べています。

解説編では，本研究所でのこれまでの ICF-CY 関連研究及び今回の全国の特別支援学校を対象とした悉皆調査の結果から，活用方法だけでなく，ICF 及び ICF-CY やその活用についての基本的な理解啓発を促す必要があるということが明らかになったことを踏まえ，特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用と，よく用いられる「ICF 関連図」について具体的に解説しています。

事例編では，10 編の事例を紹介しています。それらの中では，総論編での知見と関連づけながら，それぞれの取り組みの中での背景，活用の場面，活用の目的，活用の際の ICF 又は ICF-CY の観点，成果，課題等について述べられています。これらの事例には，これまでの取り組みの改善やこれからの取り組みへのヒントになることが含まれていることと思います。

提案編では，実際の ICF 及び ICF-CY の活用につなげられるようなツールとして，①特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用方法（試案）の提案，②本研究において開発してきた教育的活用電子化ツール，③特別支援教育における ICF 及び ICF-CY 活用に関するよくある質問と答え（FAQ），④ ICF 及び ICF-CY 活用事例文献データベースについて，それぞれ紹介しています。

最後に，本研究の成果と課題について述べた後，資料編として 4 編掲載しました。これらについても，事例編同様，これまでの取り組みの改善やこれからの取り組みへのヒントになることが含まれていることと思います。

総論編 2-3 で紹介している全国の特別支援学校への悉皆調査では，回答校の 5 校に 1 校の割合

で何らかの形でICF又はICF-CYが活用されているという結果が明らかになりました。この結果は，当初の我々の予想よりも大きい数字でしたが，一方で，本研究所に研修に来られる先生方や全国の学校現場で出会う先生方の声，電話や電子メールでの問い合わせ，研修会の講師依頼等の動きと接するにつけ，この結果にはうなずける感じもしています。これから，ICF及びICF-CYへの関心や活用のニーズはますます高まるのではないかと思っております。

そのような中で今回の研究成果報告書及びWebサイトでの情報提供が少しでもお役に立てば幸いです。本報告書の中の随所で述べておりますが，ICFやICF-CYは特別支援教育実践の改善・充実に資する一つの道具に過ぎないと考えていますが，一方で使い方を工夫すれば有効な道具であると考えています。

ICF及びICF-CYの活用という一つの切り口が，子どもたちの成長発達に資することを心より願います。今回の研究成果の報告は一つの区切りではありますが，まだまだ改善すべきところもあります。多くの方々から忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

研究代表者　徳永亜希雄